

◆ 今週のコメント

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が3例(男性1例(30歳代), 女性2例(20歳代, 30歳代))で, 血清型はすべてO157です。本年の累積報告数は26例となっています。詳細は下記ホームページをご覧ください。
○京都市感染症情報センターホームページ「腸管出血性大腸菌感染症発生状況」
<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000068305.html>
- 水痘(入院例)の報告が1例(女性, 10歳代)あります(第40週追加分)。平成26年9月19日に全数報告対象疾患になってから, 初めての報告です。

◆ 今週のトピックス: <咽頭結膜熱>

咽頭結膜熱の定点当たり報告数は0.59(24例)で, 過去5年間の同時期と比較して最も多い報告数となっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- 三類: 腸管出血性大腸菌感染症 3例【1月以降の累積報告数 26例】
- 五類: 水痘(入院例) 1例(第40週追加分)【1月以降の累積報告数 1例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

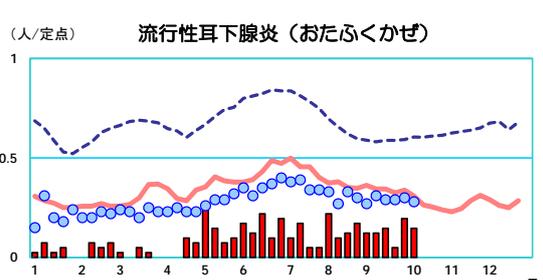
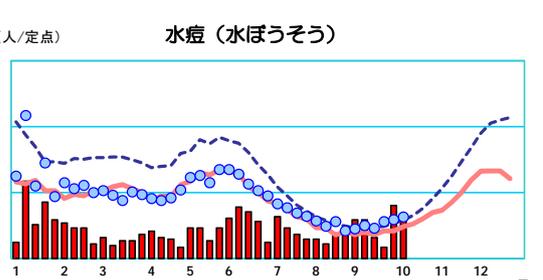
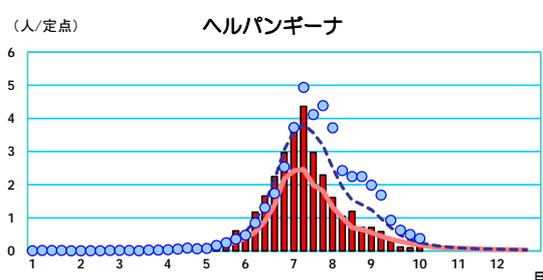
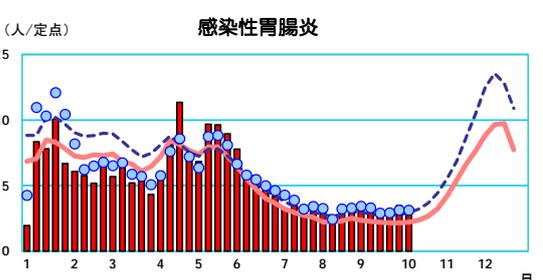
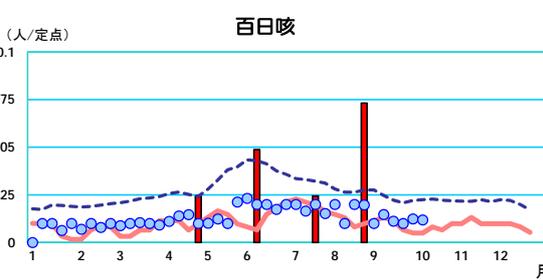
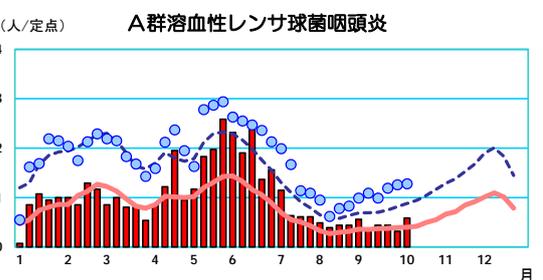
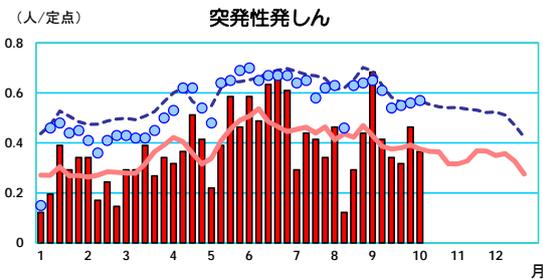
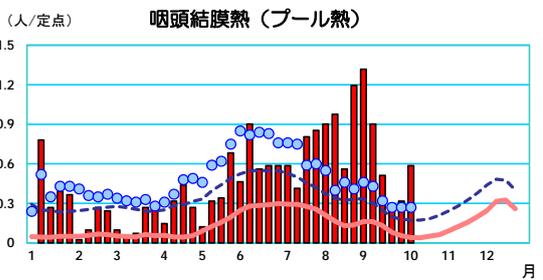
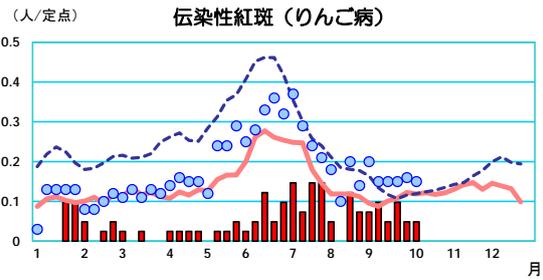
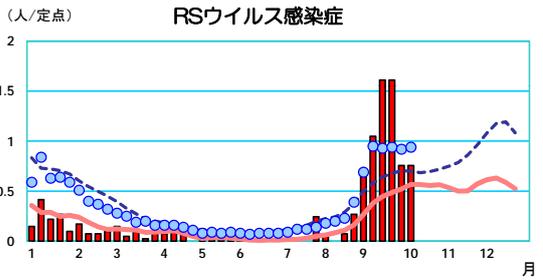
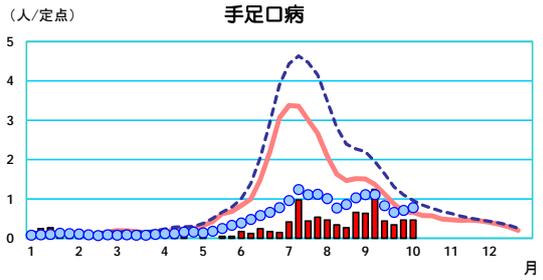
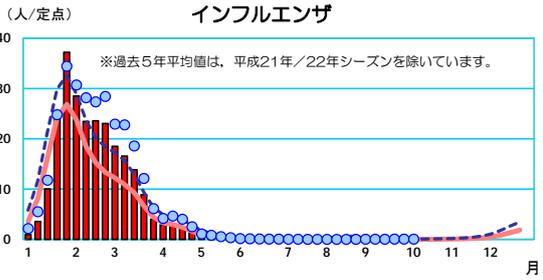
定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.01	1
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	2.76	113
	② RSウイルス感染症	0.76	31
	③ 水痘	0.63	26
	④ 咽頭結膜熱	0.59	24
	④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.59	24
眼科	流行性角結膜炎	0.40	4

【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <咽頭結膜熱>

(注) 京都市のデータは, 平成26年10月16日現在の報告数で, 全国の還元データと若干異なる場合があります。
また, 本情報での患者数は, 届出医療機関所在地での集計で, 患者の住所を示すものではありません。

インフルエンザ及び小児感染症の疾病別推移グラフ（平成26年）



第41週(10月6日～10月12日)トピックス: <咽頭結膜熱>

咽頭結膜熱の定点当たり報告数は0.59(24例)で、過去5年間の同時期と比較して最も多い報告数となっています。また、第30週以降、継続して「過去5年平均値+2SD(*)」を上回っており、かなり多い状態が依然続いています。

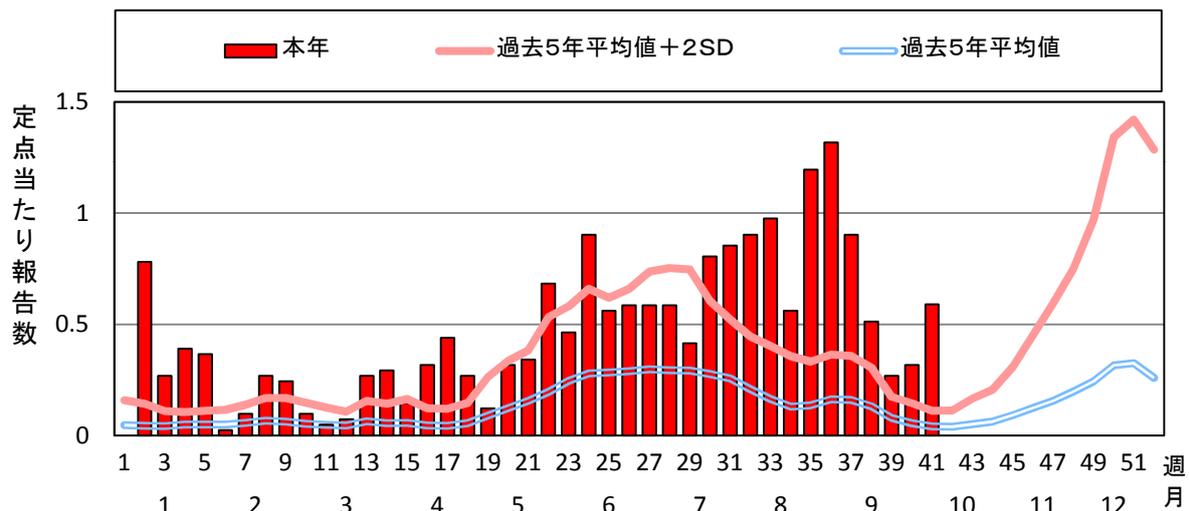
咽頭結膜熱は、例年、6月頃から徐々に増加しはじめ、7～8月に流行のピークを形成します。しかし、本疾患の原因であるアデノウイルス自体は、特に季節特異性はなく、年間を通じて分離されており、夏以外にも流行することがあります。

昨年は6月に流行のピークを迎えた後、いったん減少しましたが、11月以降増加に転じ12月に最大の報告数となりました。本年は5月頃から増えはじめ、6月にいったん落ち着きましたが、7月以降増加し続け第36週(9月1日～9月7日)に本年で最も多い報告数となっています。冬季に向けて、さらに報告数が増加する可能性もありますので、今後の発生状況に注意が必要です。

アデノウイルスは、感染力が非常に強く、手指を介したり飛沫により感染するので、流水と石鹸による手洗いやうがいを行うことが重要です。また、色々な消毒剤に対して比較的高い抵抗性を持つウイルスですので、器具に対しては煮沸、次亜塩素酸ソーダが有効です。

(*)SDとは標準偏差のことで、データのばらつきの大きさを示す尺度です。下のグラフにおいて、赤の棒グラフ(本年の定点あたり報告数)がピンクのライン(過去5年平均値+2SD)を超えているときには、過去5年間と比較してかなり多いことを意味しています。

本市の定点あたり報告数の推移



本市の過去5年間との週別比較

